

ヴァージナル

—新座に根付く古楽文化—

● 鈴木 暁

はじめに

2008年のフェルメール展では本邦初となる5点を含む7点が公開され大盛況であった。そのうちの1点が『ヴァージナルの前に座る若い女』(*A Young Woman Seated at the Virginals*)である⁽¹⁾。フェルメール(Johannes Vermeer, 1632-1675)はこの他にも『ヴァージナルの前に立つ女』(*A Lady Standing at the Virginal*)『ヴァージナルの前に座る女』(*A Lady Seated at the Virginal*)『音楽の稽古』(*A Lady at the Virginal with a Gentleman*)の3点にヴァージナルを描いている⁽²⁾。

ところで新座にはチェンバロ制作の第一人者である久保田彰氏が工房を構えている。筆者は「フェルメール展を記念して」(久保田氏曰く)家庭用ヴァージナルの制作を始めた同氏にヴァージナルを作っていただいた⁽³⁾。日本人に大変人気のあるフェルメールに描かれているために美術愛好家には知られている半面、バロック音楽の専門家でも意外と知らないヴァージナル。本稿ではこのヴァージナルを簡単に紹介していこう。

ヴァージナルとは⁽⁴⁾

ヴァージナルとはチェンバロ族の楽器である。チェンバロというのはピアノの前身にあたる鍵盤楽器である。同じ鍵盤楽器ではあるが、ピアノがハンマーで弦を叩いて音を出すのに対し、チェンバロではプレクトラムという爪で弦をはじいて音を出す。両者は発音原理にとどまらず構造も素材も音色も、そしてまた奏法も異なるまったく別の種類の楽器である。チェンバロはグランドピアノに似た形をしていて、奏者から見て垂直方向に弦が張られている。これに対し、奏者から見て水平方向に弦が張られている楽器が一般にヴァージナルと呼ばれている(写真1、2参照)。楽器の形状は音の響きにも重要な影響を及ぼす。ヴァージナルのための曲をチェンバロで弾くと、曲の性格とイメージが楽

器の音色と音質に合致しないことがあるし、その逆もまた真である。筆者と同じく久保田氏作のチェンパロとヴァージナルを所有している八百板正巳氏は、ヴァージナルの響きを自身のサイトで具体的に表現している⁽⁵⁾。



写真1



写真2

ヴァージナルとの出会い

小学生のとき偶然にチェンバロの音を聞く「衝撃的な」出会いがあり、以来筆者にとってチェンバロは憧れの楽器であった⁽⁶⁾。パイプオルガンを習いバロック音楽に親しむようになると、同時代の代表的楽器でもあったチェンバロを弾くことへの望みが一段と強くなっていった。そこでチェンバロ制作者や輸入販売元、チェンバロ教室で実物を見たり、弾いたりさせてもらった。そして2007年の暮れに久保田氏の工房にお邪魔したのである。

チェンバロは習ってはいたものの、すぐを買うことはできない。幸い同氏から練習用の一段鍵盤のチェンバロをお借りすることができた（写真1）。本物のチェンバロは素晴らしく、ピアノで練習していたところに比べ音の鳴りもチェンバロらしくなり、先生からも褒められました⁽⁷⁾。

その後チェンバロを返すことになり、ちょうどよい機会だったので制作をお願いすることにした。チェンバロはもやは馴染みのない楽器とは言えないが、自分で弾くだけでなく実物を見たことも聴いたこともない人たちに聴かせたい。特に病院のようにすることもなく退屈なまま毎日を過ごさざるを得ない人々に活力を与えることができれば、と持ち運びのできる楽器を望んでいた。そんな折、久保田氏から家庭用の小さなヴァージナルの制作に取り掛かるという話を聞いたのである。チェンバロも捨てがたいが、ヴァージナル全盛のイギリス・ルネサンス期の音楽に興味を持ち始めていたので、持ち運びしやすいように特別に軽量化したフル装飾のヴァージナルの制作をお願いした（写真2参照）。

フェルメールの『ヴァージナルの前に座る女』では楽器の蓋裏には風景画が描かれているが、ラテン語の銘を書き入れることもある。久保田氏は予め何種類かの銘を用意してあるが、筆者は特別に『新約聖書』の中から、蓋裏には「ヨハネによる福音書」第15章13節「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」を、前蓋の裏には「ルカによる福音書」第10章21節「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます」を書いてもらった（写真2参照）。またできあがり予定が早春であったので、早春のイギリスをイメージした絵を響板に描いてもらった（写真3参照）。できあがったヴァージナルは八百板氏の説明通り、高音は明るく、低音は太く強い音が鳴り響く楽器に仕上がりに、外観は非常に見栄えのよい明るい色である。



写真 3

タッチとアーティキュレーションとオールドフィンガリング⁽⁸⁾

一般にチェンバロは音の強弱をつけることのできない、音の変化の乏しい単調な楽器であるように言われている。確かにピアノのように指先のコントロールや手や腕に入れる力の加減で音の強弱をつけることはできない。しかし打鍵のスピードによって音に変化をつけることも、長めに鍵盤を押すことによってアクセントをつけることも可能である。ただ、チェンバロで和音を弾くと耳に不快な濁った音が強く出てしまうことがある。そのためにチェンバロではピアノ以上にアルペッジョが多用されることになる。ピアノとチェンバロの奏法では、このようなタッチの他にもアーティキュレーションも大きく異なる。

アーティキュレーションに直接関わる指遣いもまたピアノとは異なる上に、オールドフィンガリングと呼ばれるバロック以前独特の指遣いがある。右手も左手も親指から小指に順に1から5の番号をつけると、例えばハ長調の上昇音階ドレミファソラシドは、右手は34343434、左手は12121212であり、下降音階ドシラソファミレドは右手は32323232、左手は34343434となる。無論速いパッセージではこのような指遣いは不可能であるが、随所にオールドフィンガリン

グを交えると曲にも趣が感じられるものである。

ヴァージナル奏法⁽⁹⁾

ジャイルズ・ファーナビー (Giles Farnaby, 1560–1640) の有名な『ジャイルズ・ファーナビーの夢』を例にヴァージナルの奏法を紹介してみよう。

わずか13小節の作品だが、3つの部分から成り立っている。基本的に2小節を一まとまりとし、レガートぎみに弾く。第1小節の左手の3つの和音はピアノのように一度に弾くと音が強すぎるので、緩やかなアルペッジョがふさわしい。第1小節右手のメロディが第3小節の左手で再現されるので、第3小節の左手は歌うように。そして第4小節の両手による2つの和音も初めと同じくアルペッジョで。第5小節の右手のFからCへの上昇音階はオールドフィンガリングで34344となる。ちなみに冒頭のFには装飾記号がついていて、ここはFEFとなる。同じ第5小節のバスのFGAは第1、3小節同様に歌うように。第6小節では右手の最後のFがタイになって次の小節に結ばれているので、その前のAでアーティキュレーションをする。そして第7小節ではタイで延

[CXCIV] Giles Farnaby's Dreame.

The image displays the musical score for 'Giles Farnaby's Dreame', consisting of three systems of music. Each system has a treble clef staff and a bass clef staff. The first system shows the initial melody in the treble and a bass line with chords. The second system, marked with a '2', continues the melody and bass line. The third system, marked with a '3', concludes the piece with a final cadence. The score includes various musical notations such as notes, rests, and ornaments. The name 'GILES FARNABY.' is printed at the bottom right of the third system.

ばしたFが次にオクターヴ上がるが、ここでもアーティキュレーションが必要となる。そして次のED、CBはそれぞれ2音づつ区切るアーティキュレーションとなる。そのためにここでもオールドフィンガリングを使って3232とするのがよい。この第7小節では左手も下降音階となっているので、ここでもED、CBのアーティキュレーションで指遣いも3232となる。第9小節冒頭の和音と第10小節中ごろの4声の和音もまたアルペッジョになる。また第9から10小節左のバスFGABAは歌うように。第10小節中ごろから第11小節にかけてのソプラノのDからEは小節線を越えてはいるが下降音階なのでレガート奏法になり、第8小節最初のAは2の指で弾き、2分音符を伸ばしている間に5の指に置き換えEまで弾く。第6小節と同じように第11小節の最後のDがタイになって次の小節まで伸びているので、その前のEでアーティキュレーション。そして第12小節の右手、アルトのAからF^{is}と下降しているので歌うように。8分音符のC^{is}と次のDはアーティキュレーションをし、最後のソプラノDCが2音のアーティキュレーションとなる。第12小節最後の和音もアルペッジョである。

おわりに

久保田氏との約束であるヴァージナルを持ち運んで演奏を聴いてもらえるようになるにはまだ程遠いが、約束が果たせる日が来るまで勉強を続けたり、こうしてヴァージナルの紹介をするなどして新座に根付いた古楽文化の発展に少しでも貢献できれば幸いに思っている。

註

- (1) フェルメール展「光の天才画家とデルフトの巨匠たち」(Vermeer and the Delft Style) 2008年8月2日から12月14日(東京都美術館)。アサヒコム (<http://www.asahi.com/ad/clients/vermeer/topics1214.html>)によれば、118日間の会期中の総入場者数は93万4222人で、日本で開かれた美術展の中では歴代4位の記録である。
- (2) 日本語と英語によるフェルメールの3点の作品名は朽木ゆり子『フェルメール全点踏破の旅』(2006年、集英社)による。
- (3) 精力的にチェンバロの制作を続ける久保田氏は2009年に『チェンバロ 歴史と様式の系譜』というDVDBOOKをショパンから出版し、詳しくわかりやすい解説の他にDVDでヴァージナルやチェンバロなどの演奏を視聴できる。

- (4) 詳しくは渡邊順生『チェンバロ・フォルテピアノ』（東京書籍、2000年）を参照。
- (5) 同氏のサイト（<http://www.tochio.net/~yaoita/instrument3.html>）の「音の特徴」参照。
- (6) 2006年、ヤマハ銀座店55年を記念した「私とヤマハ銀座店」エッセイキャンペーンでチェンバロとの出会いを書き、「素敵な作品」10点に選ばれた。
- (7) チェンバロのタッチは軽いので音自体はピアノよりも簡単に出せるが「音を鳴らす」のはまた別であり、しっかりとした打鍵をしなければならない。
- (8) タッチとアーティキュレーションについてはエタ・ハリッヒ＝シュナイダー（山田貢訳）『チェンバロの演奏法—技法・様式・資料—』（シンフォニア、1996年）参照。
- (9) 楽譜は *The Fitzwilliam Virginal Book* (Volume Two), edited by J.A.Fuller Maitland and W.Barclay Squire, Dover, 1979, PP. 260–1による。なおこの奏法はあくまでも筆者が習い、理解し、演奏する限りにおける解釈であり、筆者の無理解、誤解、思い違いもあり得るし、他の解釈も当然ある。